

随想「甘え」が日本を滅ぼす

どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

第41回 日本の教育に欠けているものは何か

1. 教育に必要な三つのステップ

教育において、親離れして一人で逞しく生きていくことができる人間を育てるためには、次の三つのステップが必要不可欠である。

第一ステップは「知識を詰め込む」教育だ。第二ステップは、問題に対して自分で考えて答えを見つけ出す、考えさせる教育だ。第三ステップはさらに高度で、問題自体を自分で見つけ出し、その上で解答を探すものだ。

日本の教育は徹底して第一ステップに固執してきた。ただ小学校教育は第二ステップがかなり組まれている。生徒に手を挙げて答えさせ、感想文を書かせ、日記を書かせたりする。

ところが中学に入ると突然教育方法が変わり、先生の板書きをひたすら書きうつしてそれを覚えるという、徹底して受け身の勉強スタイルとなる。高校では大学受験を控え、一方通行の教育がさらに徹底する。

日本は1890年の教育勅語教育以来、徹底して第一ステップの教育であった。これが戦後も変わらず引き継がれ、「教育勅語の亡霊」の如く生き残り、日本の今の精神文化を構築する基盤となっている。

これは命令に忠実で指示を待つタイプの人間を養成するための教育であり、忠実なサラリーマンを養成するためには最も適した教育である。知識を植え込むためには効率が良いが、考える能力、論理的思考は養えない。

第二、第三のステップは、リーダーを養成するために必要な教育であり、改革をリードできる能力を養うものである。ベンチャーに挑戦できる人間を養成するののもこれである。解答を探し求める中で論理的な思考も養うことができる。人生の危機にたいしても、それを自力で切り抜ける能力を養成するためには、これらのステップが重要だ。日本教育には、この第二、第三のステップが欠落しており、これが日本の教育の最大特徴である。

高度経済成長の成功は、第一線のサラリーマンが頑張った結果である。アメリカ等先進国に「追いつけ追い越せ」で目標ははっきりしていた。リーダーは調整だけであれば十分で、強力なリーダーは不要であった。第一のステップで育った人間だけで成果を獲得できたのだ。

ところが、成熟社会となって追いつく目標が無くなった時代に突入して、弱点が露呈してしまった。日本の進むべき方向を見出すリーダーが徹底して不足することとなったのだ。それは、政界も、経済界も、学問の世界も、芸術の世界も、全く同じ病弊に悩まされることとなった。

子供が、自分が何をすることができているかを探して試行錯誤を始めるのは15〜16歳からである。それは独り立ちしようとするごく自然な欲求であり、その欲求にこたえる教育が第二、三のステップである。第二、三ステップは、親離れ

し、厳しい社会を一人で生きていくためには必須の教育であり、諸外国はこの教育を重視する。

ところが日本では、中高教育で第一ステップに徹することにより、そのような若者の衝動を圧殺する。第一ステップに集中させる核心は受験勉強である。「余計なことを考えないで、一生懸命受験勉強していい大学にはいりなさい。そうすればいい会社に入ってバラ色の人生が待っているのよ」と繰り返し聞かされ、あてがいぶちの受験勉強をして大学に入る。

そして、社会は日本にしかない「新卒一括採用主義」で迎えてくれる。学生はみんな同じ服装をして一斉に就活を開始し、まじめなサラリーマンとなっていく。

2. 良心に従うこと

私の中学、高校時代はカナダ人のカトリックの修道士が運営する学校であったが、その時代、カナダ人の修道士が倫理の時間に繰り返し言っていた言葉があった。

「自分がどうすべきかは、良心に従って決めなさい」、「1000人の中で自分一人が違う判断をしても、自分の良心に従うのが正しいです」そして、「自分で決めたことは自分だけが責任を取るものです」、さらに「その良心は常に磨いていなければ曇るのです」と。

しかし学校を一步出ると全く逆の論理が待っていた。「周りの1000人が自分と違っていれば、自分がそれに合わせるのが正しい」、「そうでなければ和を乱すことにな

「、周りに合わせなければ空気を読めないものとして村八分になる」というものだ。

「個人が良心に従って判断し、それに対して自分が責任を取る」ということを基本に考えるのは、個人主義の核心である。自分の判断に対しては、自分だけが責任を取るのであり、他のだれも責任を取ってくれないのである。

ところが、日本は自分で判断せずに周りに合わせる事が正義である。そうすれば責任を自分がとる必要はない。なぜなら、決めたのは「周り」であり、自分ではないからである。

しかし、周りが決めたということとは、だれが決めたか判らないことを意味する。ということは、結局だれも責任を取れないこととなり、これこそ日本人の大好きな「和」の世界を現出させるものだ。ここでは個人主義は存在せず、個人主義は利己主義とイコールである。

ただ周りに合わせる事が正義だと言っていると、改革が必要な時や変化が求められる時に俄然と弱点が露呈する。変化や改革は周りと違うことをすることから始まるからだ。

3. 自由がはびこるのはアメリカの陰謀か

「最近では、自由がはびこって、みんな勝手なことをしている」と嘆き、「これはアメリカに対する第二の敗戦だ」とか「アメリカの陰謀だ」と憤る人間に時々お目にか

かる。

しかしアメリカでは徹底して「自分で考えて判断し、その結果は自分で責任を負う」という観念を重視する。もちろん、自分の判断の基本は、自分の良心の声である。彼らにとっては、それは「自由」そのものであり、「自由」は責任を取るから自由なのである。勝手なことをするのが「アメリカの陰謀」であるわけがない。

日本は「甘え社会」であり、大人になっても母親に対する甘えから抜け出せないでいるので、「自分で判断」して行動してもそれに対して「自分が責任を負う」という意識が乏しい。そこでは、「お母ちゃんに尻拭いしてもらいたい」という意識が働くのだ。

日本でみんなが勝手なことをしていると感じるとすれば、それは日本社会で、自分で責任を取ることを放棄した「甘え」が増殖しているだけである。

ただ、これがはびこっては困るので、克服すべきことになるのだが、日本社会は「自分の判断に対して責任を持たせる」という、責任を取る方向でなく、逆に、自分で「判断」という場面を可能な限り縮小させることで解決しようとする。

その方法は前述したように、まずは、自分で「判断」せずに、周りに合わせることで責任を回避することだ。しかし、それだけでない。絶対逆転しない序列、例えば、年齢、先輩と後輩、年功序列などの上下関係を作って目上、目下と

いう「タテの秩序」を構築し、このタテの序列の中で、目下が自分で判断せずに目上に忠実に従うようにする。これで、目下は責任回避ができる。日本の会社の年功序列は、まさにこの典型的な成果である。

こうなれば学校教育が頑固に第一ステップに固執することも理解できる。第二ステップや第三ステップの教育をしては、自分でその良心にしたがって判断する人間が増え、彼らが自分で判断して目上に従わないという困った現象がはびこることになるからだ。

ただこの解決方法はそのままだと、極めて困ったことが生じる。目下が目上に従えば、責任は目上がとることになり、目上の目上、つまりトップに責任が集中することになるからだ。しかし、日本社会はこの問題を巧みに解決する知恵を持っている。それは、「判断」をみんなが集まってすることにより、責任を分散させて曖昧にし、結局だれも責任を問わない体制を整えることだ。

ここでは、トップは自分で決断し責任を負うのでなく、様々な意見や利害を調整する調整型が理想とされる。会社の稟議制という日本だけの制度も、一人が判断して責任を取るのではなく、何人もの人がハンコを押しかつて責任を分散させるシステムだ。理想的な上司は、部下に多くを任せてみんなを決めるタイプとされている。

このように、ここでも「判断」をみんなですることにより、「責任」

を分散させ、その結果誰も責任を負わなくさせるシステムが構築されている。そしてそこには、「和」の世界が広がる事となるのだ。

4. サムライは責任を回避しなかつたはずだ!

戦国のサムライは16才くらいで元服し、一人前のサムライとして戦場に出かけ、命をかけて戦った。自分で考えずに、「あてがいぶちの教育」で満足している今の日本の高校生とは、全く逆の世界で生きていた。サムライは自らの力で自分の生きる道を探さなければならならなかったのであり、「自分で判断し、自分で責任を取る」ことが求められた。

我々の先祖ができたことを、今の日本人ができないわけはないはずだ。



金子博人
(かねこ・ひろひと)

金子博人 法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程（商法）終了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会（IFTA）会員。大東文化大学法科大学院、日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員（東京工業品取引所）。日本フライムリアルティ投資法人執行役員。



金子博人法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目10番4号 和孝銀座8丁目ビル7階

<http://www.kaneko-law-office.jp>

掲載内容の無断転載・転用を固く禁じます。